

「かなしむ」ということ

心理学講師 佐方 哲彦

♪ ひとにはかなしみが深いほど、ひとにはやさしくできるのだから… ♪

これは、君たちもよく知っている武田鉄也の『贈る言葉』の中に出てくる歌詞の一節です。悲哀を数多く体験することが、人に対する愛情を育てていくのだから、かなしむことから逃げてはいけない、というメッセージを含むこの部分が、私には妙によく響いて残っています。

臨床心理学を教えている看護学生らに、患者に暖かく共感的に接するために必要なことは何ですかと聞かれるとき、私はこの一節を引き合いに出しながら、日頃からかなしむことを受け入れるようにすることだとよく答えます。自分がかなしむことをイヤがらないだけでなく、相手のかなしみを受け止めて見守ることができることが大切なのです。実際に、かなしむことの手先の人の中には、相手のこころをわからないばかりでなく、自分の気持ちにさえも気づけない人が多いようです。

ところで、『広辞苑』で「かなし」をひくと、「悲し・哀し・愛し」とあります。胸が一杯になってせつない気持ちを、昔の日本人は「かなし」といったのです。一方、「かなし」に使われる「愛」と「哀」は、ともに「アイ」と読みますが、これはため息の音（おん）だということです。そして、「愛」の文字は、こころの中が一杯になり、のろのろと足をひきずるように歩きながら、ああ、とため息をついている状態を象形化したものだといわれています。まさに、愛することは「かなしむ」ことなのです。ついでにいつておきますと、「哀」は、こころをいためて出てくる、ああ、というため息を口もとによせあうことだそうですし、「悲」は、こころが左右に引き裂かれて、いたましく感じている気持ちを表現したものだということです。

現代は、悲哀を喪失した時代だといわれます。それは結局、かなしみとともに、愛も失ってしまった時代でもあるのです。現代社会の非人間性を排して、愛を取りもどすためには、かなしむことを覚悟せずして愛することはむつかしいということ、われわれ一人ひとりがよく認識する必要があるようです。このことはまた、別れのかなしみを受け入れてこそ、人とこころから出会うことができるということの大切さにも通じるのではないのでしょうか。

君たちが人間的に成長し患者に慕われる医者になるためにも、一所懸命に「かなしむ」ことを体験してほしいと願っています。そしてまた、君たちとの新たな出会いが、あとで「かなし」と思えるような出会いであることを期待しながら、「よろしく」という挨拶の言葉を贈りたいと思います。